

第13号



発行

檜山教職員組合

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む

〒043-0056 江差町字陣屋町86-1
Tel 0139(52)0858 FAX(52)1490
発行責任者 石橋英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

女性教職員健康・生活・育児に関するアンケート

「疲れ取れない」8割超



写真はイメージ。本文と関係ありません。

制度と環境の改善は切実

回収数は48件と例年より少ないですが、管内全町から寄せられ、調査結果もこれまでのものとおよそ重なる傾向を示しました。20代30代が14人、40代が21人、50代が13人です。

健康状態に不安を抱える人が48%に上ります。一日6時間以下の睡眠との回答が37.5%で、81.3%が「前日の疲れが取れない」と回答しています(上図・中図)。「ほとんど取れない」との回答が15%近くに、深刻な実態をうかがわれます。自由記述欄にも、「疲労感が抜けずつらい」「こんな状態で仕事を続けていいのか」など、悲痛な訴えが見られます(別掲)。

「不要な仕事や研修を根本から見直してほしい。働き方改革といっておろそかになっていることがおそろそかになっていることが気になる」と、現場で進行する実態を危惧する意見も寄せられています(別掲)。

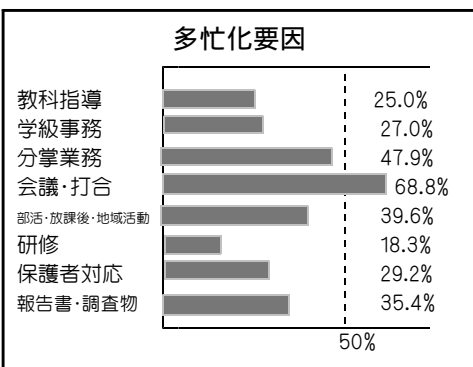
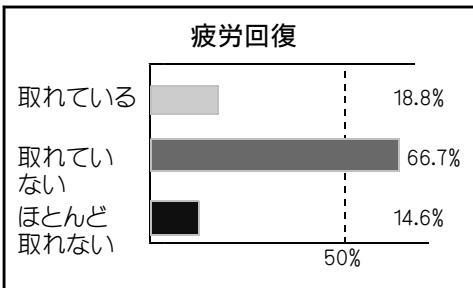
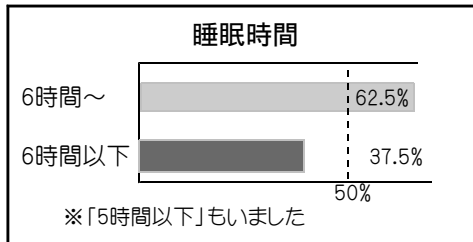
「ハラスメント」についての設問に、「体験した」「見聞きした」を合わせて4人が回答を寄せました。不適切な言動を見聞きしたという事例や、長時間の相談打合せの対応を余儀なくさせられ困惑しているなどといった訴えが複数人から寄せられています。また、昨年度までのアンケートでは、「威圧的な言動に気が病んでいる」といった訴えが3年間寄せられていました。厚生労働省資料は、職場ハラスメントについて「職務内の優位性を背景に業務の適正な範囲

ハラスメントの訴えも

を超えて精神的・身体的苦痛を与える又は職場環境を悪化させる行為」と定義し、6つの類型を提示します(下表)。そして「業務上で、たとえ悪意がなくとも適正な範囲を超える場合もなすべき」と警鐘を鳴らします。開かれた関係のなかで、校長を中心とした共同の学校づくりが、今日の重要性を持ちます。

職場のパワーハラスメントの行為類型	
厚生労働省対策資料より	
①	暴行・傷害(身体的な攻撃)
②	脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言(精神的な攻撃)
③	隔離・仲間外し・無視(人間関係からの切り離し)
④	業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制、仕事の妨害(過大な要求)
⑤	業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと(過小な要求)
⑥	私的なことに過度に立ち入ること(個の侵害)

檜山教職員組合女性部が毎年実施している「女性教職員健康・生活・育児に関するアンケート」の結果がまとめられました。概要を紹介します。



「分掌業務」(47.9%)、「部活動・放課後活動等」(39.6%)、「報告書・調査物」(35.4%)と続きます(下図)。本来職務の中心である「教科指導」や「自己研修」が後景に追いやり、日々の活動や対応に追われる姿が浮かび上がります。

「会議・打合せ」と回答、以下「分掌業務」(47.9%)、「部活動・放課後活動等」(39.6%)、「報告書・調査物」(35.4%)と続きます(下図)。本来職務の中心である「教科指導」や「自己研修」が後景に追いやられ、日々の活動や対応に追われる姿が浮かび上がります。

仕事、健康、休暇などについての自由記述

- ・生理で休みたいことが何度かあるが、なかなか...
- ・生理休暇をとれる環境があれば...
- ・不妊治療に関する制度があればと思う(知らないだけかもしれないが...)
- ・子どもがいないので、マイノリティーはつらい。
- ・生徒からの「暴言」などはハラスメントではないが、ぶつけ所がなく精神的にとてもきつかった。
- ・身内の障害介護が切実な問題。数年後には親の介護も必要になりそう。
- ・仕事に追われている。もつと先生の配置数が増え、1人1人の負担が減るといいのにな~。
- ・疲労感が抜けずよつとつらい。年齢もあるが、責任を問われ、集中力も衰えているのできつい。
- ・年々、体力が落ち、身体のあちこちに衰えを感じる。以前にできていたことができない。ふんばりがきかない。身体が思うように動かない...悲しくなる。こんな状態で仕事を続けていいのか、いつそのこと辞めてしまえばフレッシュな人材が一人増えるんじゃないかと思悩む日々。
- ・仕事から帰ってからの家事はなかなか疲れる。今年度になってから右肩が上がりなくなり、通院している。その通院も夜になり、帰宅が8時9時になる。
- ・更年期の休暇、今後は必要になると思う。
- ・「定時退勤」「働き方改革」といっても、全然仕事は減らない。人を増やしてほしいし、不必要な仕事や研修はもっとあるはず。率先して根本から見直してほしい。やっぱりどんどん新しいことが増え続けているような気がする。一方、「働き方改革」といって、一番大切な教材研究までおろそかにしている先生がいることも気になっている。授業は教師の命！ここには時間と熱意をさくべきなのではないかと日々感じる。
- ・「働き方改革」はありがたいが、学校閉庁日が都合と合わなかったり、割振りなしの日が限られて困る。
- ・勤務時間を過ぎての会議はやめてほしい。
- ・病気で入院と治療が続いたが、管理職が優しく対応してくださったので、安心して休暇を取れた。留守中の業務も分担してやってくださった。
- ・別居を強いる異動があれば嫌だなと思う(家族と過ごす時間が確保できないのは不満...)

れています(別掲)。

行使したとする回答者が皆無だったことが注目されました。記述欄に、「生理で休みたいことが何度かあるが、なかなか...」「生理休暇を取れる環境があれば...」などといった吐き気がつづられ、取りたくても取れない現場事情が想起されます。生理休暇は本来、母性保護の観点から積極的

に行使され、その取得が十分に保障されなければなりません。今日の学校現場を覆う多忙実態を象徴します。他にも「サボッてる気持ちになる」「罪悪感がある」などの記述も見られ、職場環境の在り様を垣間見せます。制度と環境の改善は切実で急務です。

(仕事と子育てについての自由記述は裏面で紹介しています)

檜山民主教育研究会 第41回 冬の研究集会

染み入る講演 感動深く

学校は楽しいからホントに楽しい

2月2日、檜山民主教育研究会の第41回冬の研究集会が開催されました。北海道生活指導研究協議会...



檜山教育・子育てフォーラム厚沢部集(2010年)と一緒に作る 写真は本文と関係ありません

明日もほんとに

学級開き、N美さんは自分の名前を言うのもたどたどしく、誕生日も知らなかった。周囲の声々に「怖い！」と耳を塞ぎ、パニックになる。「大きな声やいろ

でも寝ちゃうの迷惑かな?」 「みんなでお話している時に自分がしたい事を言うのは?」などとやり取りを交わしながら、少しずつルールづくり。 生活の中で経験の無い子には分からないことも。N美さんもS男くんも、「みなさん、立ってください」に座ったまま。『みなさん』はS男くんもN美さんも、この部屋にいる人全部:S男くん、立ちましよう。N

美さん、立ちましよう」と言い換える。N美さんは何でも「これ、なあに?」と聞く。「イスだよ。お尻につけるのを『座る』って言うよ。」「はい」と素直に喜んで吸収していく。 N美さんは「朝ご飯」も食べたことがないから知らない。就寝も11時過ぎ。欠席で無連絡の時はこちらからお母さんに、「朝大変でしょう?うちもだよ。電話で遅れまして教えてくれたら大丈夫だから。ゆつくりご飯食べたら出してね。あんまり食べれなくても連絡帳に書いてくれたら学校で様子みるから大丈夫だよ。」「あ、そっか」と母親の安心したような返事、こんなやりとりが続く。

音が苦手なN美さんには運動会の練習時の音が地鳴りのように聞こえる感じ。他の耳痛を訴える子と同じく耳栓で対応。 遠足準備の連絡で家庭訪問。夜業のお母さんが就寝中で遮光した暗い室内からN美さん、そしてその背後に妹さん。「お母さんにお手紙渡してね。遠足楽しいから来てね。待つてるね」と辞去するも、昼夜逆転の生活、暗闇の中でじつとしていた幼い一人の子どもの「絵」が浮かび、いたたまれない。 S男くんは素直。ほとんど字は読めないが、本を眺めては頷いている。「S男くん、本好きなの?」「うん、勉強しているの」と笑顔で答える。形を真似ることに難があり、文字を薄くなぞり書いたプリントで、N美さんと一緒に学習。とにかく「がんばりました」のはんこをもらってゴールすると大喜び。朝顔の観察カードに種子を描く作業だが、N美さんは「お手紙書いたよ」、S男くんは「車」と

カードをくれる。「お、すごいね」と受け取り、すかさず「がんばりました」のはんこ。「これ違うよ。もう一回やりましよう」と言っはいけないと思った。「どんどん描いていいよ」と新しい紙を持たせる。 遠足には二人とも元気に参加。 S男くんは顔ほどもある大きなおにぎり。N美さんはすごいデコキヤラ弁当。貧困と格差の「底」にありながら、表層的にはそれが見えづらい。 前触れなくS男くんの母親が来校し、「S男は字書けないし、一緒に勉強教えてやろうとすると泣くんだ。上の子たちは学校入ってなるとかなくなったけど、S男は先生がいろいろやってくれていると覚えられないでしよ。遅れてるのかなあ:」と言う。その口調にS男くんに対する愛情を感じた。「S男が学校行かなくなったら本当にヤバイなつて。一応、長男だし、自分で働けるようになってほしい。必要なら検査とかできるけど何でもして」と続ける。「百回練習すればとか無理な方法で学校嫌いになったら意味ないよね。詰め込まず、周りと比べないでS男くんのやり方でいきましょう。お家でも『頑張ったね』『すごいね』と言ってあげてね」と返すと、「ありがとございませう」と笑顔で帰っていった。 TTの専属支援。M子さんとM夫くんは自分が落ち着く場所に机を移動し、居場所を確保して学習にとりくむ。N美さんとS男くんも。複式学級と個別支援ブースが混在する学級と考えて開き直った。 保護者にも知らせ理解を得た。 S男くんとN美さんは家が斜め向かい。下校はいつも一緒。二人

いろいろな所から聞こえる音が怖い子もいるよ。誰が話すのか順番を知らせないよ、急な大声で学校が楽しくなくなるよ」と、一人ずつお話をすることを実感させた。他にも、寝てしまいう子、暴れ出す子も。「学校は頑張ることが多くて疲れてイライラ怒ったりしてみんなを困らせないよ。うに体が自然に落ちて着かしているんだよ。みんなに迷惑や危ないことをした時は注意し、ケガしそうな時は本気で怒ります。でも寝ちゃうの迷惑かな?」 「みんなでお話している時に自分がしたい事を言うのは?」などとやり取りを交わしながら、少しずつルールづくり。 生活の中で経験の無い子には分からないことも。N美さん、立ってください」に座ったまま。『みなさん』はS男くんもN美さんも、この部屋にいる人全部:S男くん、立ちましよう。N

美さん、立ちましよう」と言い換える。N美さんは何でも「これ、なあに?」と聞く。「イスだよ。お尻につけるのを『座る』って言うよ。」「はい」と素直に喜んで吸収していく。 N美さんは「朝ご飯」も食べたことがないから知らない。就寝も11時過ぎ。欠席で無連絡の時はこちらからお母さんに、「朝大変でしょう?うちもだよ。電話で遅れまして教えてくれたら大丈夫だから。ゆつくりご飯食べたら出してね。あんまり食べれなくても連絡帳に書いてくれたら学校で様子みるから大丈夫だよ。」「あ、そっか」と母親の安心したような返事、こんなやりとりが続く。

音が苦手なN美さんには運動会の練習時の音が地鳴りのように聞こえる感じ。他の耳痛を訴える子と同じく耳栓で対応。 遠足準備の連絡で家庭訪問。夜業のお母さんが就寝中で遮光した暗い室内からN美さん、そしてその背後に妹さん。「お母さんにお手紙渡してね。遠足楽しいから来てね。待つてるね」と辞去するも、昼夜逆転の生活、暗闇の中でじつとしていた幼い一人の子どもの「絵」が浮かび、いたたまれない。 S男くんは素直。ほとんど字は読めないが、本を眺めては頷いている。「S男くん、本好きなの?」「うん、勉強しているの」と笑顔で答える。形を真似ることに難があり、文字を薄くなぞり書いたプリントで、N美さんと一緒に学習。とにかく「がんばりました」のはんこをもらってゴールすると大喜び。朝顔の観察カードに種子を描く作業だが、N美さんは「お手紙書いたよ」、S男くんは「車」と

の席を隣同士にした。そんな二人の授業中の会話。「N美ちゃん、いっぱい書いてすごいわね」、「うん、分かる字ふえたんだ」。N美さんは五十音表の文字を写すようになっていた。「これ、S男の『し』だよ」とS男くんが言う。のんびりした二人の「教室」。周りもそれぞれ方向に向けた不思議な空間だが、二人は幸せそう。 国語の時間、二人にひらがなの積み木を与える。M夫くんが「Mも積み木で遊びたい。N美とS男だけずるい」と言う。T男くんが立ち上がり、「N美とS男は字書けないんだよ。ホントでできないんだよ。でも勉強いやだって言わないでしょ。自分でできること頑張ってるんだよ」と。他の友だちも続く。M夫くんは「(自分は)頑張ってますんでした」と自席に戻る。 二人には身も蓋もない言い方だが、それは本当だった。 ある日の下校時、「N美ちゃん、一緒に帰ろう」とランドセルを背負うの手伝ってやりながら、S男くんとN美さんは仲良く廊下を

歩く。「ねえねえ、N美ちゃん、いところ知ってるんだよ」とS男くん。「どこのなの?」とM美さん。「学校だよ。学校ってホントいいところだよ。N美さんも「そうそう、いいところだよ」と。S男くんも返す。「学校ってさ、いっぱい遊べるし、勉強もできるし、ご飯食べたり、ホントいいところだよ。後ろに私がいることに気づいてない二人に、「学校、楽しいかい?」と声をかけた。「うん。あのね、明日もホントに来るよ。N美ちゃんも来てね。」「N美も学校来るんだよ。明日ホントに来るんだよ。 二学期の始業式、N美さんが欠席。「もしかして始業式忘れてたかい?大丈夫だよ」とお母さんに電話を入れてみた。「あ...:そうなんだ。私が起きられなくて、N美は元気ですよ」。元気がよくなった。 じゃ、明日、大丈夫だね。」「はい、明日から出しますね」と明るい笑い声が返ってきた。N美さんは翌日からまた登校を続ける。

女性教職員健康・生活・育児アンケート自由記述欄より
働きながら子育てをする上で感じていること・つづき等
・子育てと仕事の両立が難しいと思うことがある。時間が足りない...
・時間が足りない!余裕がなくなると子どもにいららしてしまふ。食事の準備も含めて家でも常に働きっぱなし。1日が早い...
・子どもに対して罪悪感はある。夫への不満と。
・家事と育児がおろそかになってしまうことが多く、毎日反省している。
・病気で学校を長く休むのが心苦しい。病気のときも(子どもを)預かってもらえる場があるとい。
・せめて家族で夕食をとりたい。そのため6時には家に帰れるようにしたいと思っている。夕食作りができるよう仕事を増やさない、軽重をつける等、自分改革も必要だと思ふ。
・大学生、高校生、中学生の子どもがいる。進路のことなど人生についてゆっくり語る時間がない。二週間に一度はゆっくり映画やビデオなど、子ども見たい。
・保育所がない。学童がない。女性が働き続けられる環境がない。母や子にやさしくないと日々感じます。
・子どものことで休みを取る分、普段から頑張っているママさん先生がたくさんいる。自分が子育てしていた頃と比べ、環境は随分とよくなっていると思うが、甘えずムリしすぎず、不調時にはムリせず子育て期を乗り越えてほしい。
・定時には帰りづらい。自分だけ仕事をサボっている気持ちになる。勤務時間外でも、自分の担当や係の仕事があったりと実際は帰れないこともある。
・今年度は子育てしながら働ける環境に、学校側も配慮していただき感謝している。みんなより早く帰ることに申し訳なさを感じる。しかし定時では到底帰れない仕事だと思ふ。一日の時間が足りなさすぎ。
・当町の子ども園が夜6時30分まで預かってくれるので助かっている。食物アレルギーへの対応もしてくれる。ただ、小学生になると、給食が食べられなければ持参しなければならない。働きながら毎日準備するのは大変なので、小学校の給食も代替食を出してほしい。

(文責:あま)